

## 「末松謙澄と日本美術全書」



けんちょう  
末松 謙澄  
(1855～1920)

末松謙澄没後100周年とリブリオ行橋の開設とを記念し、5月9日に予定していた国際シンポジウム「謙澄とヨーロッパにおけるジャポニズム」は残念ながら新型コロナウイルスの影響で延期せざるを得なくなりました。この国

際シンポジウムの目的は、末松謙澄の日本美術に果たした役割を、英国人ウィリアム・アンダーソンの著作 *The Pictorial Arts of Japan* 『日本美術全書』(1886) を軸に討論することでした。基調講演は「末松謙澄の著作からわかること」と題して彬子女王殿下にお願いし、パネリストとして学習院大学美術史教授の佐野みどり氏、日本の近代化を専門とする前ロンドン大学准教授アンガス・ロッキヤー氏など専門家5人によるシンポジウムの計画でした。

彬子女王殿下は英国オックスフォード大学で、「19～20世紀に大英博物館が収集した日本の美術品とその展示の事例にみる英国人の日本美術観の変化について」の論文で博士号を取得、その後ウィリアム・アンダーソンの著作やヨーロッパに渡った美術品についての論文を執筆されており、謙澄については *The Pictorial Arts of Japan* 『日本美術全書』を翻訳したことを高く評価しています。

『日本美術全書』の翻訳は謙澄にとって、「大変な労力と費用と使い、友人・知人や家族に不義理をした」のですが、「この本がわが国民にとって有益であると信じるがため、公務の余暇をすべて使い、百事を擲<sup>なげう</sup>って完成した」と序文に記載しています。『日本美術全書』についてはアンダーソンとの出会いから翻訳まで10余年が費やされています。二人の出会い、英訳源氏物語の17帖に描かれた当時の画壇の様子や宮中での絵合わせの描写にアンダーソンが着目し、留学中の謙澄に面会を求めたところから始まっています。

このアンダーソンの著作は日本で初めて刊行された本格的美術史で、それまでは『本朝画史』や『画乗要略』といった部門別の美術史的な書物はありませんでしたが、美術全体を俯瞰した著作は皆無でした。本書には絵画だけでなく、彫刻、陶芸、工芸など幅広く専門的に記載され、実証的かつ合理的にまとめられていて、美術史が確立されていなかった当時の日本では画期的なものであると評価されました。

本格的に歴史を勉強した謙澄にとってこの *The Pictorial Arts of Japan* との遭遇は運命的な出会いだったようです。謙澄はこれ以降、美術に傾倒し、日本画会の会頭を引き受ける一方で美術品収集を精力的に行い、500点にも及ぶ本格的な絵画、美術品を所蔵していました。明治30年代以降の日本画壇の活性化に果たした謙澄の役割は『日本美術全書』とともにいずれ大きく再評価されるべきでしょう。

国際シンポジウムはコロナが終息した時点で、再度彬子女王殿下や皆様をお願いして実施する予定です。ご期待ください。また、第3回ゆくはしビエンナーレにおける謙澄像の応募作品が出そろいましたので、大賞決定と除幕式も、状況を見ながら実施いたします。大賞作品は謙澄の美術愛好に対する、また海外雄飛に対するオマージュとなるでしょう。



▲末松謙澄が翻訳した  
『日本美術全書』

(文化人末松謙澄を考える会 植田義浩)